

明治—昭和前期，学習院の 中国人留学生について

村松 弘一

明治 10 (1877) 年，華族の子弟のための教育機関として学習院が開校した。この学習院に中国大陸や台湾から来た学生がいたことは，あまり知られていない。どのような学生が学習院へと留学したのか。本稿では中国大陸および台湾からの留学生に関して，学習院アーカイブズ所蔵資料及び外務省外交史料館所蔵資料などから得られた成果をまとめることとした。

1，明治—昭和前期の学習院の留学生

まず，はじめに学習院アーカイブズ所蔵の明治 10 (1877) 年以降の入学・入院名簿，明治 11 (1878) 年以降の退学・退院名簿の調査に基づき，明治から昭和前期 (1945 年まで) の学習院の国外 (戦前の台湾・朝鮮を含む) からの留学生全体を整理する。年度によって多少形式は異なるが，名簿には「入学年・月・日」，「身分・国名」，「氏名」，「入学時在籍学年」等の情報が記されている。「身分・国名」には日本人の場合は皇族・華族・士族・平民と記されており，外国人の場合は出身国が示されている。これらの名簿から外国人学生 (「身分・国名」欄に朝鮮・台湾とある学生を含む) を抽出して作成したものが表 1「明治—昭和前期，学習院留学生リスト」である。明治 14 (1881) 年から昭和 19 (1944) 年まで，学習院に在籍した国外からの留学生は 53 名にのぼる。内訳は中国大陸 11 名，台湾 9 名，朝鮮 (韓国) 22 名，タイ 4 名，欧州 7 名である。欧州出身の学生は明治 14 (1881) 年から明治 20 (1887) 年に限定され，名簿には国名の記載はない。学習院等に在職していたお雇い外国人の子息が在籍していたと考えられる^[1]。中国大陸からは明治 32 (1899) 年以降，朝鮮半島からは明治 42 (1909) 年以降，台湾からは大正 10 (1921) 年以降，タイからは大正 9 (1920) 年と昭和 13 (1938) 年，昭和 18 (1943) 年に入学した学生が見られる。国名の記載は時期によって変化している。中国大陸からの学生は，明治期では「清国人」，大正期で

は「支那人」、昭和に入ると「中華民国人」、満洲国成立以降は「満人」、「満洲国人」と記されている。台湾からの学生は大正期には「平民・台湾人」、昭和期には「台湾人」もしくは空欄である。また、朝鮮半島からの学生は、明治42（1909）年入学の2名は「韓国人」（この「韓国」は大韓帝国を示す）、日韓併合後の明治43（1910）年以後は、「朝鮮人」「朝鮮公族」「朝鮮貴族」「朝貴」「公族」「王族」等と表記されている。

以下、本稿では表1で示した外国人学生のうち中国大陸・台湾からの学生について個別に分析をすすめたい。

表1 明治-昭和前期, 学習院留学生リスト

和暦	西暦	月日	属性	氏名	入学した学年	退学名簿記載 ※追加情報
明治14年	1881年	9月		アメケ・フーリ		「明治23年9月16日中等学科2年級甲 外国人 アメデ・フーク」 ※フランス人
明治16年	1883年	6月		アイゼッキ		「明治20年11月24日尋中5乙 外国人 アイゼッキ」
明治16年	1883年	6月		セームス		「明治20年11月24日予備科1級 外国人 ゼイムス」
明治16年	1883年	9月11日		アンリー・フーク		「明治25年9月14日中等学科2年級乙 外国人 アンリ・フーク」
明治16年	1883年	12月21日		オットゼン		「明治20年3月29日予4甲 外国人 ラットゼン」
明治18年	1885年	10月14日	[士民]	フレエツ	初小二	「明治24年11月7日 中等学科2年級甲 フレエツ・ショー子」 ※当月入学生18名のうち華族12名、士民6名。
明治20年	1887年	9月26日	外国人	フレデリック・フーク	予六	「明治27年8月18日中等学科1年級甲 フレデリック・フーク」
明治32年	1899年	2月1日		張厚混		「明治33年8月30日中等学科3年級 外国人張厚混」 ※清国出身。入学名簿には「混」とあり。張之洞の孫、張権の子
明治39年	1906年	9月5日	清国人	岑—徳徴	初等学科五年級	名簿では見え消線で削除
明治39年	1906年	9月5日	清国人	岑—徳広	初等学科三年級	名簿では見え消線で削除
明治41年	1908年	4月1日	清国人	岑 徳徴	中等学科一年級	「明治41年9月11日中等学科1年級 清国人 中央幼年学校入学 岑徳徴」 ※岑春煊の子

明治—昭和前期, 学習院の中国人留学生について (村松)

和暦	西暦	月日	属性	氏名	入学した学年	退学名簿記載 ※追加情報
明治 41 年	1908 年	4 月 1 日	清国人	岑 徳広	初等学科四年級	「明治 43 年 6 月 30 日初等学科 6 年級 清国人 家事都合により帰国のため 岑徳広」 ※岑春煊の子, 唐紹儀の娘婿
明治 42 年	1909 年	4 月 11 日	韓国人	高 興諡	中等学科一年級	「大正 3 年 3 月 31 日高等学科 1 年級 朝鮮貴族 高興諡 私立農業大学高等部選修科に入学」
明治 42 年	1909 年	4 月 11 日	韓国人	高 義正	中等学科一年級	「大正 2 年 1 月 14 日中等学科 4 年級別科 朝鮮人 高義正」
明治 44 年	1911 年	1 月 9 日		李垠殿下	中等学科一年級	「明治 44 年 9 月 1 日中等学科 2 年級 王世子李垠殿下 中央幼年学校予科御入学」 ※朝鮮。高宗の子。
明治 44 年	1911 年	1 月 9 日	朝鮮貴族	趙 大鎬	中等学科一年級	「明治 44 年 9 月 1 日中等学科 2 年級 朝貴 趙大鎬 中央幼年学校入学」
明治 44 年	1911 年	1 月 9 日	朝鮮人	徐 丙甲	中等学科一年級	「大正 3 年 9 月 10 日中等学科 4 年級 朝人 徐丙甲 死亡」
明治 44 年	1911 年	1 月 9 日	朝鮮人	嚴 柱明	中等学科一年級	「明治 44 年 9 月 1 日中等学科 1 年級 朝 嚴柱明 中央幼年学校入学」
大正 2 年	1913 年	4 月 8 日	朝貴	李 丙吉	初等学科一年級	「昭和 2 年 3 月 31 日 (高等科) 卒業 朝貴 李丙吉 京都大・文・哲学」
大正 3 年	1914 年	4 月 8 日	朝鮮貴族	李 丙喜	初等学科一年級	「大正 5 年 9 月 9 日初等学科 3 年級 朝鮮貴族 李丙喜 帰鮮のため」
大正 8 年	1919 年	4 月 8 日	朝貴	李 勇吉	初等学科三年級	「大正 12 年 4 月 10 日中等学科 1 学年 朝鮮公族 李勇吉 東京陸軍幼年学校」
大正 9 年	1920 年	4 月 8 日	支那人	張 仁楽	高等科一年級	「大正 11 年 6 月 20 日高等科三学年 支那人 張仁楽 中華民国県知事に任官」 ※張之洞の子
大正 9 年	1920 年	4 月 8 日	支那人	黎 紹基	高等科一年級	「大正 12 年 3 月 31 日高等科卒業 支那人 黎紹基 帰国」 ※黎元洪の子
大正 9 年	1920 年	4 月 21 日	シヤム国王族	政尾 勲	初等科一学級	「昭和 8 年 3 月 31 日高等科文科卒業 シヤム国人 名草薫」 ※本名: モム・ラジャヤ・ランダ・ナクサット

和暦	西暦	月日	属性	氏名	入学した学年	退学名簿記載 ※追加情報
大正 10 年	1921 年	4 月 8 日	朝鮮貴族	閔 孚勲	高等科一学年	「大正 13 年 3 月 31 日高等科卒業 朝鮮貴族 閔孚勲 京大・法・法」
大正 10 年	1921 年	4 月 8 日	平民 台湾	郭 兆壽	中等科一学年	「大正 13 年 4 月 10 日 中等科 3 学年 台湾平民 郭兆壽 家事の都合」
大正 10 年	1921 年	4 月 8 日	平民 台湾	李 広成	中等科一学年	「大正 13 年 4 月 10 日 中等科 3 学年 台湾平民 李広成 家事の都合」
大正 10 年	1921 年	4 月 8 日	平民 台湾	郭 雙龍	中等科一学年	「大正 13 年 4 月 10 日 中等科 3 学年 台湾平民 郭雙龍 家事の都合」 ※錦茂茶行 郭春秧の子
大正 11 年	1922 年	4 月 12 日	朝鮮公族	李綱公殿下	初等科四学年	「大正 15 年 4 月 8 日中等科 2 学年 朝鮮公族 李綱公殿下 東京陸軍幼年学校へ」 ※李垠の甥
大正 12 年	1923 年	4 月 9 日	平民	郭 兆汾	中等科二学年	「大正 14 年 4 月 10 日中等科 1 学年 台湾平民 郭兆汾 家事の都合」
大正 13 年	1924 年	4 月 8 日	支那人	林 師敬	中等科一学年	「昭和 7 年 4 月 6 日高等科理科 2 学年 支那人 林師敬 家事の都合」
昭和 2 年	1927 年	4 月 8 日	支那人	齊 鴻邁	中等科一学年	「昭和 6 年 4 月 1 日中等科第 5 学年 中華民国人 齊鴻邁 陸軍士官学校へ入学」 ※齊燮元の子
昭和 5 年	1930 年	4 月 8 日	中華民国人	溥 傑	高等科文科第一学年	「昭和 8 年 3 月 31 日 高等科文科卒業 満洲国人 溥傑 士官学校」 ※清・宣統帝溥儀の弟
昭和 5 年	1930 年	4 月 8 日	中華民国人	潤 麒	高等科文科第一学年	「昭和 8 年 3 月 31 日 高等科文科卒業 満洲国人 士官学校」 ※清・宣統帝溥儀の妻の異母弟、溥儀の妹の夫。
昭和 7 年	1932 年	4 月 8 日	朝貴	金 虎圭	高等科文科第一学年	「昭和 10 年 3 月 31 日高等科文科卒業 朝鮮貴族 金虎圭 東大・文・社会」
昭和 8 年	1933 年	4 月 10 日	朝貴	李 丙周	中等科第五学年	「昭和 14 年 3 月 31 日高等科文科卒業 朝鮮貴族 李丙周 京大・文・史学」

明治—昭和前期, 学習院の中国人留学生について (村松)

和暦	西暦	月日	属性	氏名	入学した学年	退学名簿記載 ※追加情報
昭和 9 年	1934 年	4 月 9 日	朝貴	李 丙喆	中等科第三学年	「昭和 15 年 3 月 31 日高等科文科卒業 朝鮮貴族 李丙喆 九大・法文・経」
昭和 12 年	1937 年	4 月 1 日	満人	奎 垣	高等科文科第一学年	「昭和 16 年 3 月 31 日 高等科文科卒業 満人 奎垣 東京・文・教育」 ※清朝高官増崇の孫
昭和 13 年	1938 年	4 月 1 日	昌徳宮	李玖殿下	初等科第一学年	「昭和 15 年 9 月 1 日初等科第三学年 王族 王世子李玖殿下 大阪偕行社附属小学校へ御転学」 ⇒昭和 16 年 7 月 11 日に初等科第四学年へ再転入 ※朝鮮。李垠の子
昭和 13 年	1938 年	4 月 1 日	朝鮮貴族	李 鍾喆	高等科文科第一学年	「昭和 16 年 3 月 31 日高等科文科卒業 朝鮮貴族 李鍾喆 名古屋大・医」
昭和 13 年	1938 年	4 月 1 日	暹羅国	プリーダー・プラナスリー	初等科第六学年	「昭和 16 年 4 月 11 日中等科第 2 学年 泰国人 プリーダー・プラナスリー 家事上の都合により帰国」
昭和 14 年	1939 年	4 月 1 日	公族	李冲公子	初等科第一学年	※朝鮮公族
昭和 14 年	1939 年	4 月 1 日		陳 守毅	初等科第四学年	※台湾人。錦記茶行・陳天来の孫、陳清波の子
昭和 14 年	1939 年	4 月 1 日	朝貴	李 海晴	高等科理科第一学年	「昭和 18 年 9 月 30 日高等科文科卒業 朝鮮貴族 李海晴 東大・文・言語」
昭和 15 年	1940 年	4 月 1 日		陳(颯川)守実	初等科第一学年	※台湾人。陳守毅の弟
昭和 16 年	1941 年	4 月 1 日	公族	李 沂	初等科第一学年	※朝鮮公族
昭和 16 年	1941 年	4 月 1 日		颯川守信	初等科第一学年	※台湾人。台湾名は陳守信。陳守毅・守実の弟
昭和 16 年	1941 年	4 月 1 日	台湾人	顔 恵民	中等科第一学年	台陽鋳業株式会社・顔欽賢の子。一青妙・竊の父
昭和 16 年	1941 年	4 月 1 日	朝鮮貴族	李 鍾承	文科第一学年	「昭和 18 年 9 月 30 日高等科文科卒業 朝鮮貴族 李鍾承 東大・法・政治」
昭和 17 年	1942 年	4 月 1 日	朝鮮貴族	朴 勝敬	高等科文科第一学年	
昭和 18 年	1943 年	4 月 1 日		李 清	初等科第一学年	※朝鮮。李綱の子
昭和 18 年	1943 年	4 月 1 日		顔 恵忠	中等科第一学年	※台湾人。顔恵民の弟
昭和 18 年	1943 年	4 月 1 日	泰国人	ウイブン・ワラワン	高等科文科第一学年	

和暦	西暦	月日	属性	氏名	入学した学年	退学名簿記載 ※追加情報
昭和18年	1943年	4月1日	泰国人	プラサット・パンヤラシュン	高等科文科第一学年	
昭和19年	1944年	4月1日		郭布羅宗光	初等科第一学年	「昭和19年7月25日初等科第一学年 修学上の都合」 ※潤麒の子

※表1は『入学名簿 自明治十年六月至同四十五年四月』・『入院学生名簿 大正元年十二月以降』、『退学名簿 自明治十一年七月至同四十五年六月』・『退院学生名簿 大正元年七月以降』・『退院学生名簿 昭和十五年超』(学習院アーカイブズ所蔵)に基づき作成した。閲覧に際しては学習院アーカイブズの桑尾光太郎氏、調査に関しては村井綾氏の協力を得た。

※備考の「 」内は退学名簿・退院学生名簿の記載である。なお、昭和19年以降の卒業生・退学者に関する情報は退学・退院名簿としてまとめられた資料が存在しないことから、本表には記さない。

※ は中国大陸出身者、 は台湾出身者。

2, 明治期学習院の中国人留学生

明治期に中国大陸から学習院に留学した学生は張厚琨・岑德徴・岑德広の3名であった。このうち、初めての中国大陸からの留学生である張厚琨は明治32(1899)年、岑德徴・岑德広の兄弟は明治41(1908)年に入学している。張厚琨は張之洞の孫、岑德徴・岑德広は岑春煊の子である。

(1) 清国からの最初の留学生—張厚琨

中国大陸から日本への留学が始まったのは、日清戦争で清朝が敗北した翌年の明治29(1896)年からである。1896年の留学生は13人、彼らは東京高等師範学校校長であった嘉納治五郎の下で学んだ。明治31(1898)年に日本に留学した清国人は60人以上にのぼった。この年は中国大陸では戊戌の変法そして戊戌の政変が発生し、清朝末期の混乱のなかであった。そのなかで、『勸学篇』を著し日本への留学を勧めた人物が張之洞(1837-1909)である。張之洞は直隸南皮の人で、山西巡撫、兩広総督、湖広総督を歴任し、武漢を拠点に活動した清朝の官僚である。『勸学篇』出版の翌年、明治32(1899)年に張之洞の孫の張厚琨が学習院最初の中国大陸からの留学生として学習院に入学した。張厚琨は張之洞の長男・張権の子であり、のちに奉天市陸軍講武堂校長や国民政府河北省政府主席代理となった張厚琨は彼の弟にあたる。張厚琨は約1年半学習院で学び、明治33(1900)年8月30日に退学した。その後、陸軍士官学校を卒業したが、清に帰国した後、武昌にて落馬して死亡したという^[2]。

張厚琨の学習院入学については、『入学名簿』のほか、明治32年(1899)2月1日の学習院『教務課日誌』(学習院アーカイブズ所蔵)に「清国張之洞の孫、張厚琨、本日入学す。ただ科級は未定につき、自ら授業の科目を撰して、その級の教場に参加せしむ」と記されて

いる。特に学年は決められなかったようである。張之洞は明治 31 (1898) 年 12 月 19 日に上海領事代理の小田切万寿之助の元に連絡を入れ、清国学生の日本留学団一行を派遣することを伝えた^[3]。湖広総督の張之洞が派遣した学生は武備学堂出身者 9 名, 西湖書院出身者 10 名と張厚琨 (武備学堂出身) の 20 名であった^[4]。これに南洋大臣・劉坤一の派遣する 20 名と合わせ, 張厚琨を含む 40 名が, 1 月 14 日, 上海を出発して日本郵船株式会社の薩摩丸に乗船して日本へと向かった^[5]。

張厚琨が学習院へ到着した直後の様子は, 当時, 学習院長であった近衛篤磨の日記に詳しい (表 2 として関連記事をまとめた)^[6]。上海から出発する前日の 1 月 13 日, 外務省から清国の留学生を学習院に入学させたいという連絡が近衛院長のもとに入り, 翌日には張厚親 (厚琨の誤りか) を学習院に入学させたいと上海の小田切からの書信が届けられた。日本到着後, 1 月 22 日に近衛院長は張厚琨本人と面会した。他の留学生とともに来日した監督者の張斯栒・鄺国華, および北京日本公使館二等書記官 (通訳) の橋原 (井上) 陳政の三名が同席した。25 日に再び近衛院長と面会し, 留学中の一切を近衛に託し, その官舎に入り, 教官一名を監督者として置くことを決めた。27 日には, 荻村教授^[7]を監督者として官舎に入らせること, 中国語のできる高等科学生の榊某 (榊弘二郎) を同宿させることとした。ただし, 宿舎問題について, 当日, 橋原陳政と外務次官の都築馨六から, 張厚琨を家族のいない教師 (荻村教授のこと) に監督させるのではなく, 橋原に託したらどうかとの提案があったが, 近衛は承服しなかった。その後, 榊弘二郎が張の指導学生となることを断ったことから, 岩倉具張 (岩倉具視の次男である岩倉具定公爵の長男) と岩倉道俱 (中等五年級, 岩倉具視の四男) が指導学生となった。このように, 官舎にて監督教員がおり, 指導学生もいるという待遇は, 当時のほかの清国留学生と比較すると特別なものであった^[8]。なお, 張は, 当時, 学習院教授であった著名な東洋学者・白鳥庫吉とも会っている。張は白鳥庫吉教授が自宅で学生を集めて開いていた塾 (研究会) への参加を希望したが, 白鳥は自宅が狭いため, 入塾を断った。しかし, 参加していた塾生たちはどんなに窮屈でも彼を入塾させたいと申し出たという。結局, 張は塾に入ることが許されなかった (表 2 1 月 27 日参照)。

2 月 1 日, 清国側監督者の張斯栒・鄺国華が立ち会い, 橋原陳政の通訳のもと, 張厚琨の学習院入学式がおこなわれた。その後の張厚琨の日本での活動は様々な資料に断片的に見られる。例えば, 4 月 21 日には荻村錦太教授と学生 1 名とともに東京砲兵工廠を訪問している^[9]。7 月 1 日には成城学校 (現在の新宿区成城高校) に留学している学生と東京本郷の西片町の日華学堂を訪れている^[10]。10 月 22 日には, 学習院を訪問した清朝視察団の丁鴻臣が, 張厚琨は皮袋を背負い初級の兵士教練を受けていたと記録している^[11]。また, 丁鴻臣に同行した沈翊清の日記にも「中国留学者が一人おり, それは南皮尚書 (張之洞を示す) の文孫

表2 張厚琨受け入れの経緯 『近衛篤磨日記』明治32年1月～2月

1月13日	外務省より幹事を呼び出しにて、清国留学生一名を学習院に入学せしめたしとの事なりしという。直に承諾の旨、回答せしむ。
1月14日	(小田切万寿之助(上海領事)からの書状) …清国貴顕の師弟数名を、学習院にて引き受け教育せられて候て、差支無之旨、御話有之候に付き、客冬湖北に出張、張之洞総督に会見の際、貴意の趣転述及候処、頗る欣喜の情を表し、今般愈同人の孫厚親なる者を本邦に送り貴院に入学せしむ旨、以電報通知有之候。同人は多分本月十四日發薩摩丸にて出発致す儀と存候…
1月22日	(張厚琨・張斯栴・鄺国華・橋原陳政(井上陳政、北京日本公使館通訳)と面会) 本日来たりし張厚琨は十六七の伶俐らしき少年なり。其話に、学事は勿論、留学中一切の事は余に一任するとの事、承諾の趣答えたれば、早速其趣發電するとのことなり。夫に付、小田切領事よりの添書をも携え来れり
1月23日	(白鳥庫吉と面会) 張厚琨を寄宿致させずやと問う候、熟考すべしとの事也。
1月25日	午後、橋原陳政、張斯栴・鄺国華・張厚琨等を率いて来り、厚琨学事に付種々打合す事になり、同人留学中は一切の事を余に托する事との事に付、余の官舎に入らしむる事、教官一名を監督者として置く事等を答え置く。
1月27日	張厚琨の事に就ては、弥よ荻村教授を官舎に入らしめ、監督せしむる事とす。小原駱吉も来たりたれば、同じく官舎の室割等に付き打合す処あり、又高等科学生榊某は支那語を解するよしに付き、同人にも同宿して万事心付る様依頼したるに、同人も大に喜び。又、白鳥教授は家宅狹隘の為、張を入塾せしむる事を謝絶ありし処、其塾生等は如此大切なる学生を院長より依頼せられしに、自分等の為に先生の謝絶せしは不本意なれば、自分等如何程窮屈にても忍びて張を入塾せしめられたしと申出たり。其志や実に嘉みすべきなれ共、最早他に方法も付たればとてこれを容れざりしなり。…橋原・都築(馨六)の話というは、張を官舎に入れて家族なき教師に監督せしめては、張総督の感情も如何なれば、井上伯(橋原)に托しては如何との事なり。余は張総督より万事を依托せられたる事なれば、万事の準備を為したり、然るに今日になりて他人に托せよとは心得ず、張総督の感情は何の為にあしきや、左様の御話は余は断然承認致しがたしと答え置く。
2月1日	張厚琨入学式執行(両幹事、張斯栴・鄺国華等立会)、終て尚お種々打合を為す(橋原陳政同道通訳す)。又、岩倉具張(公爵の嗣子)に張生の指導学生を命ず(榊弘二郎同断)
2月3日	岩倉道俱(中等五年級)に張生の指導学生を命ず。
2月21日	官舎に赴き、荻村教授に面会、張生の大森射的会に入会の手続きを了したる事を告げ、又、張生に色々心得を告ぐ。

である」と書かれている^[12]。張厚琨はこの翌年8月に学習院から陸軍士官学校へと進むこととなる。

(2) 清国からの留学生—岑德徴と岑徳広

張厚琨の留学から約10年後、清国からの二人の留学生が学習院に入学する。日露戦争後、中国から日本への留学生の数は急速に増加した時期にあたる。『入学名簿』によると岑德徴と岑徳広の二人の留学は、明治39(1906)年、9月5日に記載が見られるが、共に見え消し

線で消去されている（留入学が中止もしくは延期された可能性が考えられる）。その後、二人は時間を置いて明治41（1908）年4月1日に、岑徳徴は中等学科一年級、岑徳広は初等学科四年級として入学している。なお、当時の学習院長は乃木希典であった。この二人の兄弟は、陝西巡撫・山西巡撫・四川総督を歴任した岑春煊（1861-1933）の子である。西太后の庇護によってとりたてられた岑春煊は、1906年前後、慶親王・袁世凱と対立しており、子の日本留学の延期と清末の政局は関係している可能性がある。『退院名簿』に、岑徳徴は明治41（1908）年9月11日、中央幼年学校入学とあり、半年あまりで学習院を退学している^[13]。岑徳広は初等学科6年級の明治43（1910）年6月30日に家事都合のため帰国した。その後、イギリスのシンクタンクで研究員をつとめ、ワシントン会議中国代表団随員などを経験し、初代中華民国国務総理もつとめた唐紹儀（1860-1938）の娘と結婚した。昭和15（1940）年、南京に汪精衛政権が成立すると国民政府行政院振務委員会委員長、国民政府委員等を歴任した。日中戦争終了後、漢奸の罪により南京で逮捕されたが、香港に逃亡した。

3. 大正期学習院の中国人留学生

大正期（昭和初めを含む）の留学生には、張仁楽・黎紹基・林師敬・齊鴻邁の4名がいた。

(1) 中華民国からの留学生①—張仁楽と黎紹基

張仁楽と黎紹基はともに大正9（1920）年4月8日に高等科一年級に入学している。「身分・国名」の欄には「支那人」とある。張仁楽（1898-1971）は張之洞の子である。張厚琨は張之洞の孫であるから、張厚琨から見ると張仁楽は自分より年下の叔父ということになる。張仁楽は大正11（1922）年6月20日、高等科三年生の時に中華民国県知事に任官するため退学、帰国後、天津県長となる。満洲事変後、1932年には満洲国執政府内務官兼実業部総長、のち外交大臣をつとめる。日中戦争後は漢奸として収監されたが、出獄して日本に入学、1971年に死去した。黎紹基（1903-1983）は黎元洪の子である。大正12（1923）年高等科を卒業し帰国、その後、天津の南開大学を卒業し、その後実業家となり、済南魯豊紗廠・中興煤鉍会社の董事長となり、中華人民共和国建国後は中興輪船公司董事長となった。

張仁楽と黎紹基の留学は、黎紹基の父である黎元洪の希望であった。張仁楽は黎元洪の長女と将来結婚する約束をしており、黎元洪が彼の面倒を見ていたため、黎紹基の日本留学に張仁楽も同行させた^[14]。黎元洪（1864-1928）は湖北省出身、天津の北洋水師学堂を卒業後、明治32（1899）年、湖広総督張之洞が派遣した留学生81名の一人として、日本陸軍の近衛師団に留学した^[15]。1916年6月には中華民国大總統となったが、翌1917年には張勳による

宣統帝の復辟により失脚し、政治の第一線から退いた。二人が留学した1920年はこの時期にあたる。その後、1922年6月11日から1923年6月13日まで二回目の大総統となる。張仁楽が帰国したのは1922年6月20日であり、黎元洪の大総統就任と関係している可能性がある。

張仁楽と黎紹基の学習院入学までの過程は、「黎元洪長子及故張之洞五子本邦留学方ニ関スル件」（外務省外交史料館）の一連の文書に詳しい^[16]。大正9（1920）年1月12日、支那駐屯軍司令官南次郎から陸軍次官山梨半造へ、黎元洪の息子が日本に留学して学習院高等科に入学することを希望しているが、米国人より米国留学を勧められている。特別の取り計らいをもって是非、学習院入学を達成できるようにしてほしいとの連絡が入った^[17]。さらに、2月13日には黎紹基に加え張仁楽も同時に学習院高等科に入学させたいと南から山梨に文書が送られた^[18]。この陸軍ルートとともに、外務省ルートからも依頼が入り、2月10日天津総領事の船津辰一郎から外務大臣内田康哉に二人の留学についての文書が送られた。この文書には黎紹基のプロフィールが記されている。黎紹基、19歳、これまで北京高等師範学校教師等を家庭に聘し昨年中学程度の全課程を修了した。英語は原語による授業に差し支えない程度に達しているが、日本語の学習はまだ日が浅く、十分ではないが、黎元洪は日本に留学させて武士道的感化を受けさせたいと希望し、近頃は毎日数時間、秘書の劉鐘秀に日本語を教授させ、相当の進歩が見られる。この際、本人を学習院高等科に入学させて、学習院内に起隊し、諸学生と全く同じ取り扱いを受けさせたい。もし、同院内に寄宿させることが不可能な場合には、厳格な家庭に寄寓させ厳重に監督していただき、将来は帝国大学法科に入学させることを希望しているという^[19]。2月18日には外務省ルートの埴原正直外務次官から学習院長北条時敬に依頼の文書が送られた^[20]。その後、2月28日、黎元洪は南司令官と船津総領事を招き晩餐会をおこない、二人に黎紹基の日本留学に対しての希望を述べ、南は黎元洪の作成した「日本留学の目的」の文書を船津に渡している。その文書のなかで黎元洪は二十余年前に日本に留学した経験から日本の軍隊教育は「教育の厳格と温情」「教育の模範」「精神教育と兵卒の率直」という精神教育を主としたもので、普通教育であっても品性の陶冶に高尚であると聞いている学習院では高等な学問研究とともに武士道精神も習得させたいと述べている^[21]。

このような黎元洪の陸軍ルート、外務省ルートを使った工作が功を奏し、3月3日に学習院内で二人を受け入れる見込みとなり、宮内省大臣の判断を仰ぐ段階となった。3月7日には内田外務大臣から船津総領事に、3月25日からの一般志願者と同様の入学試験を受ける必要があるが、普通教育程度の学力と高等科での日本語による講義を理解しうる程度であるならば、試験の成績如何に拘泥せず、入学させる方針であるとの学習院の意向を伝えてい

る^[22]。3月9日には船津から内田に張仁樂と黎紹基および黎元洪の秘書の劉鐘秀が3月15日に天津を出発し朝鮮を経由して東京に向かうこと、その際の旅館その他を予め定める配慮を参謀本部の土肥原賢二少佐と打ち合わせることが伝えられている^[23]。3月10日には埴原外務次官から北條院長に来日日程が伝えられ、また、11日には埴原外務次官から大蔵次官神野勝太郎に日本までの通関に便宜を払うよう要請があった^[24]。一行は3月15日に天津を出港し、17日に京城に至り、19日に下関を経て、特急列車に乗り20日に東京に到着した。3月25日に入学試験を受験し、無事、両名とも学習院への入学が認められた。ところが、彼らの学習院への入学は中国大陸でも広まるところとなり、3月25日発行の益世報および京津泰昭士報では、日本貴族の子弟に朝観拝謁の教育を施す以外何ら学問上の権威なき学習院に入学するのは共和国の資格に抵触するものであり、在日本支那留学生等はこのため留学生会の名をもって黎元洪に対し、その子息等を召喚するか、または他校に転校させるよう勧告の文を送ると述べている^[25]。皇帝独裁から共和国に移行した中華民国の民にとって、自国民、特に前の大總統の子息が日本の皇族・華族の学ぶ学習院に留学することは許されることではないと考えたのであろう。

(2) 中華民国からの留学生②—林師敬・齊鴻邁

次の中国大陸からの留学生は大正13(1924)年4月8日に中等科1学年として入学した林師敬と昭和2(1927)年4月8日に中等科1学年として入学した齊鴻邁である。『入学名簿』にはともに「支那人」とある。林師敬は昭和7(1932)年、家事の都合で退学している。卒業時には「支那人」とある。齊鴻邁は齊燮元の子。昭和6(1931)年中等科5学年の時に陸軍士官学校へと入学した。卒業時には「中華民国人」と記されている。その後、帰国して宋哲元の軍に参加。イタリア陸軍士官学校に留学したが、1940年に結核で死去した。父の齊燮元(1885-1946)は天津武備学堂・陸軍大学・日本陸軍士官学校で学び、1920年ごろには直隸派の実力者となったが、下野し、1937年に北平に創設された中華民国臨時政府に参加、さらに、王精衛政権に加わり、華北政務委員会綏靖総署督弁、華北綏靖軍総司令となった。日中戦争後、1946年に漢奸として処刑された。

4, 昭和戦前期学習院の中国人留学生

昭和前期、満洲族の溥傑・潤麒・奎垣・郭布羅宗光の4名が中国大陸から学習院に入学した。

(1) 中華民国人から満洲国人へ—溥傑・潤麒

溥傑（愛新覺羅溥傑，1907-1994）は清朝・宣統帝溥儀（1906-1967）の弟，潤麒（郭布羅潤麒，1912-2007）は清朝末期の官僚の郭布羅榮源（1884-1951）の子で溥儀の妻・婉容（1906-1946）の異母弟である。『入院学生名簿』によれば，溥傑と潤麒はともに昭和5（1930）年4月8日に高等科文科第一学年に入学した。国名には「中華民国人」とある。ともに，昭和8（1933）年3月31日に高等科文科を卒業し，陸軍士官学校へと進学した。昭和7（1932）年に満洲国が成立したため，卒業時の『退院学生名簿』には「満洲国人」と記された。

溥傑が日本に留学するという情報は，昭和4（1929）年2月7日，天津総領事代理領事の田代重徳から外務大臣田中義一への文書で日本にもたらされた^[26]。その5年前の1924年，溥傑は溥儀とともに紫禁城を追われた。その後，1926年，溥傑は陳貫一夫妻の紹介により北京飯店で張学良と出会った。この出会いをきっかけに彼は軍人へのあこがれを抱き，奉天講武堂で学ぶことを希望するようになった^[27]。しかし，1927年，馮玉祥らの北伐軍が奉天軍を攻撃，溥傑らは天津へ避難した。1928年6月4日には張作霖爆殺事件が発生，6月10日に北伐が完了した。その直後の6月16日，溥傑は天津からの避難者に紛れて，単身長山丸に乗り込み，大連へと渡航した^[28]。ところが，天津の溥儀から関東庁に溥傑保護の依頼があり，大連警察と日本人通訳の中島比多吉（中島敦の叔父，1876-1947）によって星が浦大和ホテルにて保護された。大連滞在中，面会した康有為の愛弟子・徐勤の息子の徐良（1893-1951）^[29]から「張学良の部下になることはない。直接日本の陸軍士官学校に行った方がずっといいではないか」と説得され，結局，日本で軍事を専門的に学ぶこととなったという。その後，溥傑は日本留学の準備のため，天津日本人学校で中国語を教えていた遠山猛雄から潤麒とともに日本語の初歩を学んでいた^[30]。

そして，昭和4（1929）年2月7日，溥儀は鄭孝胥（1860-1938）を天津領事館に派遣し，溥傑・潤麒の二人が日本に留学すると伝えた。遠山は出発前に東京到着後の諸事斡旋を吉田茂外務次官に申し入れ，また，大倉喜八郎に毎月の学費のいくらかを支給することを内諾してもらっていた。入学志望学校は未定であるが，溥傑は陸軍士官学校入学を希望しており，日本到着後はその予備の学習に着手する予定という^[31]。遠山が東京まで同行し，溥傑は金乗潘，潤麒は郭継英の仮名で，3月2日に景山丸に乗船し，天津を出発した^[32]。

東京到着後，半年の間，溥傑と潤麒は東京丸の内のホテルに逗留して，毎日飲み食い・芝居・物見遊山に明け暮れ，学費・生活費を使い果たしてしまった。そこで，遠山が大倉喜七郎に経済的な支援をお願いし，さらに大倉を通じて武田秀三という中国通を日本語教師兼留学後見役にした^[33]。二人は東京都杉並区天沼の武田宅に落ち着き，一年間日本語を勉強し

た後, 学習院を受験し, 昭和5(1930)年4月, 高等科に進んだ^[34]。勉強の内容について, 漢文は前から基礎があったため骨は折れなかったが, 理数の方はかなりきつかったこと, ほかドイツ語を選んだという。学習院では「忠孝一致」の教育をしており, 平素は礼儀正しく, 教室では忠君孝親, 上を敬う道を教え込まれた。なお, 漢文教師の塩谷温は明治維新をたたえるばかりではなく, 清朝の「康熙乾隆之治」をも終始褒め称えたので, 溥傑は日本人も清朝を尊敬しているのだと思ったという^[35]。

昭和6(1931)年9月18日, 柳条湖事件に端を発する満洲事変が発生。昭和7(1932)年3月1日には満洲国が成立し, 溥儀が執政となる(のち, 皇帝)。このころ, 武田秀三は溥傑と潤麒二人の身分がばれると安全が確保できないので仮名の「金秉藩」, 「郭継英」を改め, 溥傑には「清水次雄」, 潤麒には「清水武雄」と名乗らせた。清は清朝の清, 次雄はもとの号, 武雄の武は軍人を示していた^[36]。3月13日, 溥傑は兄・溥儀の満洲国執政就任を祝うために, 潤麒・武田秀三とともに, 東京駅から鉄道に乗り, 翌14日, 旅客機で大阪から福岡の大刀洗飛行場を経由して京城に宿泊し, 15日に京城から大連に至り, 16日には鉄道で長春(新京)に到着した^[37]。帰国は4月4日, 新京には約2週間滞在した^[38]。長春滞在中の3月17日, 武田秀三は長春の領事館を訪れ, もともと溥傑・潤麒の二名は陸軍士官学校への入学を希望して日本に留学したが, 諸事情から, まず, 学習院に入学した。ところが, 学習院卒業を前に, 満洲事変に遭遇することとなった。溥儀と熟議した結果, 本来の希望に立ち返り, 来る4月1日より士官学校への入学を決意することとなった。軍部も好意的で板垣征四郎(1885-1948)参謀から陸軍省に入学につき便宜供与をお願いしたいとの連絡を入れたという^[39]。この年の夏休み, 溥傑・潤麒は再度, 新京を訪れ, 8月15日には潤麒と溥儀・溥傑の妹の愛新覚羅韞穎(三格格, 1913-1992)の挙式をおこなった^[40]。そして, 翌年の昭和8(1933)年3月, 溥傑と潤麒は, ともに学習院高等科を卒業した。卒業後4ヶ月間, 軍隊で実習し, 陸軍士官学校に正式に入学した。その後, 溥傑は満洲国での活動, シベリア抑留, 撫順戦犯管理所, そして中華人民共和国での暮らしと流転の人生を送ることとなる。潤麒は陸軍士官学校卒業後, 満洲国高等軍事学校教官となり, 戦後には中華人民共和国の全国政治協商会議委員となり, また, 中国社会科学院法学研究所に勤めた。

(2) 満洲国からの留学生—奎垣・宗光

奎垣(1917-)は満洲族で清朝高官の増崇の孫で, その妻は西太后につながるエホナラ氏的那桐の孫にあたる。結婚後, 20歳で日本に留学した。昭和12(1937)年4月1日に高等科文科第一学年に入学した。国名には「満人」とある。学習院への入学に際しては, 溥傑・潤麒の協力を得たが, 入学した1937年に, 溥傑・潤麒は千葉の陸軍歩兵学校におり, 奎垣

は経済的に自活していた。もともと3名の留学生が入学するはずだったが、ほかの学生は入学せず、同級生はみな日本人だった。昭和16(1941)年3月31日に高等科を卒業し、東京帝国大学(教育系)に進学した。卒業論文は書いたが、太平洋戦争が始まり、帰国したため、卒業はしていない。解放後は民族幹部学習班を経て、石油学院、北京五十四中学教師をつとめた^[41]。

郭布羅宗光は潤麒と三格格(愛新覚羅韞穎)との間の二人目の男子。昭和19(1944)年4月1日に初等科第一学年に入学した。

5、大正—昭和前期学習院の台湾人学生

大正から昭和前期にかけて学習院に在籍した台湾人は、郭雙龍・郭兆濤・李広成・郭兆汾・陳守毅・陳守実・陳守信・顔惠民・顔惠忠の9名がいた。

(1) 大正期の台湾人学生—郭雙龍・郭兆濤・李広成・郭兆汾

台湾からの初めての学生では郭雙龍・郭兆濤・李広成の3名であった。彼らはともに大正10(1921)年4月8日に中等科一学年に入学した。国名には「平民 台湾」と記されている。3名とも、大正13(1924)年4月10日中等科三学年の時に家事の都合で退学している。郭兆汾は彼らから一年遅れて大正12(1923)年4月9日に中等科二学年に入学した。国名には「平民」とのみ記された。大正14年4月10日に家事の都合で退学している。郭雙龍は台湾の錦茂茶行の経営者である郭春秧の六男として生まれた。郭春秧(1859-1935)は福建省同安県に生まれ、1876年、17歳の時にジャワ島スマランに移住、オランダ領東インド(蘭印)で茶と砂糖の商売を営む錦茂茶行を経営し、南洋屈指の富豪となった。1888年には台北に店舗を設け、包種茶館(郭河東公司)を経営した。明治30(1897)年には台湾籍を取得、その後、台湾茶商公会を組織するなど台湾経済の発展に大いに貢献した^[42]。中国大陸・蘭印・台湾を結ぶ華僑商人(華商)であった。郭雙龍も明治40(1907)年ジャワ島に生まれ、学習院で学び、昭和3(1928)年に香港大学経済学科を卒業し、ジャワで錦茂貨棧批発砂糖茶業にて包種茶貿易に従事、のちに父の跡を継ぎ錦茂茶行主となった^[43]。郭雙龍の留学は、父・郭春秧の茶貿易によって成功した実業家の子弟が学習院に留学した事例と言ってよい。

(2) 昭和前期の台湾人学生①—陳守毅・陳守実・陳守信兄弟

昭和前期に台湾から学習院に入学した学生は、二組の兄弟、すなわち陳守毅・陳守実・陳

守信兄弟と顔惠民・顔惠忠兄弟の5名である。陳守毅は昭和14(1939)年4月1日に初等科第四学年に入学, 陳守実(じゅん)は昭和15(1940)年4月1日に初等科第一学年に入学した。氏名欄には「陳(穎川)守実」とある。陳守信(じゅん)は昭和16(1941)年に初等科第一学年に入学した。氏名欄には「穎川守信」とある。3人ともに、「台湾」と記載がなく, また, 身分も記載されていない。

陳三兄弟は台湾・錦記茶行主の陳天来(てんらい)の孫, 陳清波(せいぱ)の子にあたる。祖父の陳天来(1872-1939)は台北・大稻埕の人で, 明治24(1891)年に錦記茶行を設立し, 東南アジアとの貿易で利益を得た。永楽座社長, 台北中央市場監査役等を歴任, 郭春秧(かくしゅん)の創設した台湾茶商公会の組長にもなっており, 陳兄弟の入学直前の昭和13(1938)年には陳天来組長の下, 郭雙龍(かくしゅうりゅう)と子の陳清波が評議員となっている^[44]。学習院卒業生の郭雙龍と父の陳清波のつながりは, 陳兄弟の学習院留学と関係しているかもしれない。陳清波(日本名は田川清波)は陳天来(てんらい)の三男として生まれ, 錦記茶行で東南アジアの包種茶貿易に従事し, マレー語にも堪能であった。1920年に東南アジアから台湾に戻り, 錦記製茶株式会社常務として茶貿易に従事し, さらに台北勸業信用組合長, 台北市商工会会長, 台北市議員を歴任した^[45]。1920年代以降, 華商・郭春秧にかわって包種茶業界の指導者となったのが台湾出身の陳天来・陳清波父子であった。陳清波は1941年には台湾茶輸移出統制株式会社・台湾水産興業株式会社・錦記製茶株式会社・台北中央市場株式会社・台湾輸出振興株式会社・同業組合台湾茶商公会・滿支向台湾茶輸出組合・第三国向台湾茶輸出組合を取り仕切った^[46]。これらの組合を通じて, 台湾から滿洲など中国大陆への茶の販路の拡大を推進した。なお, 陳清波には陳許氏鳳吟との間に二男一女, 顔氏梅玉(げんりゅう)の子)との間に六男一女がおり, 陳守毅・陳守実・陳守信はともに顔氏梅玉の子である^[47]。陳守毅は1929年, 台北市に生まれ, 泰北中学高中部卒業後, 錦記商行副經理, 蓬萊閣食堂股份有限公司常務董事を経て, 中日物産貿易有限公司執行業務股東となった^[48]。陳兄弟は郭雙龍と同様, 茶貿易による富を得た実業家の子弟が学習院に留学生した事例といえよう。

(3) 昭和前期の台湾人学生②—顔惠民・顔惠忠兄弟

もう一組の台湾人の兄弟は顔一族である。兄の顔惠民(げん)は昭和16(1941)年4月1日に中等科第一学年に入学, 国名には「台湾人」と表記されている。弟の顔惠忠(げん)は昭和18(1943)年4月1日に中等科第一学年に入学, 国名欄には「台湾」との表記はない。

顔惠民(1928-1985)・顔惠忠兄弟は台湾・瑞芳で1920年に台陽砵業株式会社を創業した顔雲年(げん) (1874-1923)の長男で四代目社長の顔欽賢(げん) (1902-1988)の子にあたる。顔家は金鉞採掘の成功によって, 台湾有数の財産家となった。顔欽賢は立命館大学を卒業した後, 台陽

礮業株式会社の経営に従事し、基隆市協議会会員、台北州参議会参議院などを歴任した。顔惠民は昭和3（1928）年、顔欽賢と郭美錦の長男として台湾基隆市に生まれた。基隆市立双葉小学校から4年生を終えた昭和14（1939）年の春、東京に移り、麴町に住み、番町小学校5年生になった。昭和16（1941）年4月、学習院中等科に入学、戦争により、昭和20（1945）年に中等科を繰り上げ卒業となり、高等科へ進学、その5月25日の東京への空襲で、顔惠民兄弟の家は全焼した。そこで、信濃町にあった同級生の犬養康彦の家に住むことになる。終戦を迎え、昭和22（1947）年5月か6月に、台湾への引き揚げ専用列車で東京を発ち、台湾へ帰国し国立台湾大学理学院地質学科に入学した。ところが、1949年11月初め、密航船に乗って、東京へ戻った。ちょうど、中華人民共和国の成立（10月1日）と中華民国中央政府が台北に置かれた12月7日の間の時期であった。その後、昭和25（1950）年に早稲田大学第一理工学部鉱山学科に入学、昭和29（1954）年に卒業した。昭和45（1970）年、一青かづ枝と結婚、7月には台陽礮業株式会社総経理に就任した。しかし、1985年癌により、死去^[49]。歯科医師で女優・エッセイストの一青妙、歌手の一青窈はその子である^[50]。顔惠民・顔恵忠兄弟の場合も台湾で成功した実業家一族の子弟が学習院に留学した事例と言えよう。

5. おわりに

以上、明治から昭和前期までの間、学習院に在籍した中国大陸、台湾からの留学生についての調査・整理の結果を終えたい。おおよそ、以下のような特徴があったと言えるだろう。

- ①明治時代、初めて学習院へ入学した中国大陸からの留学生は日本への留学を勧めた張之洞の孫の張厚琨である。その学習院での待遇は他の学校に留学した学生よりも恵まれていた。
- ②明治・大正期の中国大陸からの留学生は岑春煊・黎元洪・齊燮元など清朝末期から民国初期にかけての軍人・政治家の子息であり、卒業生のなかには陸軍士官学校へと進学した学生もいた。また、のちに満洲国や汪精衛政府などの政権に参加した者もいた。
- ③昭和前期の中国大陸からの留学生は溥傑ら清朝の末裔であり、その留学中に、満洲国が成立した。
- ④台湾の学生は成功した実業家の子であったこと。

などのことが判明した。今後も、より多くの資料を収集・整理・分析して、本稿の補遺をすすめていきたい。

※本稿は2011年10月25日に学習院大学で開催された、辛亥革命100周年特別記念講演会

「日中教育交流をめぐって」(主催:学校法人 学習院, 学習院マネジメント・スクール
共催:学習院大学東洋文化研究所)の講演記録である。当日は筆者の報告とともに、汪婉
(中国社会科学院近代史研究所研究員・中国大使夫人)「国民皆学を目指して一辛亥革命の
土壌作りに繋がった人々」、鶴間和幸(学習院大学文学部教授)「日本の東洋史教育と長安
の史蹟」の報告がおこなわれた。

注

- [1] 表1のアメケフーリ(アメデ・フーク)とアンリー・フーク、フレデリック・フークは学習院
のフランス語教師として在籍したプロスペル・フォルテュネ・フーク(1843~1906)の子と考え
られる。プロスペル・フークは明治3(1871)年来日、明治5(1873)年12月に開拓使学校(芝
公園内)にフランス語教師として赴任し、その後、帝国大学・司法省法律学校・東京外国語学
校・学習院・陸軍大学の教師として在職した。学習院には明治19(1886)年から明治38
(1905)年まで在職し、フランス語とフランス文学を教えていた。明治39(1906)年に勲四等旭
日小綬章を加授された(西堀昭「日本の教育の近代化に寄与したプロスペル・フォルテュネ・フ
ーク(1843-1906)資料」『千葉商大紀要』17-4, 1980年参照。「法朗西人勲四等プロスペル、
ホルチュコー、フーク旭日小綬章加授ノ件」, JACAR(アジア歴史資料センター) Ref.
A10112614600, 国立公文書館所蔵)。
- [2] 陳予敏『中国留学日本陸軍士官学校将帥録』(広州出版社, 2013年)「張厚琨」の項, 参照。
ただし、当該部分の記述には、陸軍士官学校入学前に日本陸軍成城学校に入学し予備学業を修了
とあり、また、陸軍士官学校を学習院在学中の1900年に卒業したとあり、その記載には誤りが
見られる。
- [3] 「張総督派遣の学生出発に関する件」(JACAR Ref.B12081617100, 明治32年1月6日, 在上海
総領事代理小田切万寿之介から外務次官都筑馨六宛文書, 外務省外交史料館)。小田切万寿之助
(1868-1934)は日本の外務官僚・銀行家。外務省入省後、天津に留学し、領事館勤務, 明治30
(1897)年には上海総領事代理, 1902年から上海総領事, 1905年には横浜正金銀行取締役となっ
た。東洋文庫の立ち上げにも寄与した。
- [4] 「湖北江蘇より派遣学生姓名及人数通知の件」(JACAR Ref.B12081617100, 明治32年1月8日,
在上海総領事代理小田切万寿之介から外務次官都筑馨六宛文書, 外務省外交史料館)。
- [5] 前掲注[3]参照
- [6] 近衛篤磨日記刊行会編『近衛篤磨日記』第2巻, 鹿島研究所出版会, 1968年
- [7] 荻村教授とは荻村錦太のこと。明治3(1870)年6月愛知県に生まれ, 明治28(1895)年文部
省第八回教員学力検定試験に及第。同年, 第五高等学校英語授業囑託となり, 明治29年から大
正4年まで学習院教授, 担当科目は英文であった。
- [8] 「清国留学生の現在及び将来」(『時事新報』明治32年8月6日時事新報)に「留学生中高貴の
出にして年齒尤も若きは張之洞総督の愛孫にして目下近衛公の監督に属し学習院に在学せり氏は
居止風采全く貴族的にして学才も亦他に劣らず学習院に在りても一方には高級の学科を受け, 一
方には下級の教課を踏めるなどして同級生に奇異の感を与ふるなどなきに非るも総じて成績宜し
き部分に属するよし。目下貴族院議長官舎に住し一人の従僕を具し食事万端を扱はしめ, 又学習
院よりは特に一人の教師を同住せしめ完全の教育を施せる由なれば品性修養の上に於ても他の年
長の学生と違ひ純然日本化せしむるの望みありとて当局者は喜び合へりと云う」とある。この記
事は日華学堂の宝閣善教が時事新報に寄稿したものである(さねとうけいしゅう『中国留学生史

- 談』（第一書房，1981年）所載の宝閣善教『行雲録』8月3日の記事により判明）。
- [9] 「貴院教授学生各1名4月21日東京砲兵工廠観覧許可の件」（JACAR Ref. C10062265700，明治32年3月29日，学習院長代理文事秘書官長細川潤次郎作成，防衛省防衛研究所）
- [10] 『日華学堂日誌』に「(明治32年)七月一日 土曜 曇天 学習院生徒ニシテ張之洞ノ令孫張厚琨，成城校生并ニ日本留学生ト同道来堂シ，階上ニテ生徒ト談ズ」とある（柴田幹夫「『日華学堂日誌』1898～1900」『新潟大学国際センター紀要』9号，2013年所載）。なお，さねとうけいしゅう『中国留学生史談』（第一書房，1981年）「第III談 日華学堂の教育」には7月1日の当該記事は採録されていない。また，同書所載の日華学堂の宝閣善教の私日記『行雲録』には，「(明治32年)1月21日 午後，湖北道台張斯拘并に張之洞の孫張坤中等，橋原と共に来堂……張坤君も愈々近々の中当学堂に入学することとなりぬ。張斯拘君は五十余歳の老人なるに，巧に英語を話し，時勢に明なるはさすがは自強学堂の総弁たる威望あり」とある。この張坤申は張厚琨，張斯拘は監督者の張斯拘のこと。張厚琨は1月22日に初めて学習院を訪れるよりも前に日華学堂を訪れていたことになる。『行雲録』の1月23日の記事には「張君は近衛公に依頼して，学習院に入学せしむこととなれり」とある。
- [11] 丁鴻臣は，光緒25（1899）年7月13日から翌1900年1月16日まで近衛師団の軍事大演習を参観するため日本を訪問した。丁鴻臣『四川派赴東瀛游歴閱操日記』（1900年刊）には「(10月22日)午後，往觀華族学習院，初為教育皇族・華族之子弟而立後又兼許士民之子弟入学，惟華族不納費而已，院中自小学・中学・高等学・大学諸級皆備……張蕪帥文孫剛孫在此中学校，於時亦負皮囊習兵操初級也」とある。張蕪帥は張之洞のこと，剛孫は張厚琨の別名である。当時，学習院の校舎は四谷にあり，また，大学科も開設されていた時期であった。学習院を訪れる日の午前中は東京郵便電信学校を視察している。なお，日記は王宝平主編『日本軍事考察記』（上海古籍出版社，2004年）掲載のものを参照した。
- [12] 沈翊清『東游日記』（1900年刊）に「全院現六百余生，内親王五人，中国留学者一人，即南皮尚書文孫也。校中不計学資甚為優待，校長近衛公爵游歴中国未回」とある。ちなみに，「図書室 中国經史子集四部具備，皆近衛公手置」とあり，これは，「陽明文庫」と呼ばれる近衛家所蔵の漢籍を学習院の教育のために提供していたことを示すものである。のち，これらの書籍は近衛家に返却されることになるが，現在でも，学習院大学図書館に「陽明文庫」と書かれた木箱が残されている。
- [13] 岑德徴の中央幼年学校入学に関しては，まず，光緒34（1908，明治41）年7月24日に清国公使の胡惟徳より外務大臣寺内正毅宛に，岑春煊は第二子で学習院中等科一年を修業した岑德徴を陸軍中央幼年学校に入学させることを希望しているとの書簡が届き，その後，陸軍省で検討した結果，その前年に同じ第一年級に編入した張之洞の孫の張厚琨（張厚琨の弟）のために定められた条件と全く同一の条件によって入学を認めるということになり，9月5日，中央幼年学校予科第一年級に編入することとなった。（「清国人岑德徴中央幼年学校へ入学の件」（JACAR Ref C04014415200，明治41年10月「壹大日記」，防衛省防衛研究所）。しかし，翌年（1909年），岑德徴は病氣療養のため清国に帰国，退学している（「中央幼年学校在学の清国学生請願帰国の件」（JACAR Ref C0 C04014563400，明治42年11月「壹大日記」，防衛省防衛研究所）。
- [14] 張仁樂は故張之洞の第五子で留学時は23歳。青島のドイツ経営の特別高等学校予科第三学年修了，大正3年に日独戦によって同校が閉鎖され退学して以来，天津に来て特に学校教育を受けず，独修していた。中学校卒業に準ずるも黎紹基にやや劣っていた。（「黎元洪長子及故張之洞の令息留学希望に関する件照会」JACAR Ref B12081650600，大正九年2月13日，支那駐屯軍司令官南次郎から陸軍次官山梨半造宛文書，外務省外交史料館）
- [15] 「湖広総督張之洞派遣留学生出発の件」JACAR Ref B12081617200，明治32年10月19日，上

- 海総領事代理小田切万寿之助から外務大臣青木周蔵宛文書，外務省外交史料館
- [16] 「黎元洪長子及故張之洞五子本邦留学方ニ関スル件」(JACAR Ref B12081650600, 外務省外交史料館)
- [17] 「黎元洪令息日本留学の件報告」(JACAR Ref B12081650600 大正9年1月12日, 支那駐屯軍司令官南次郎から陸軍次官山梨半造宛文書, 外務省外交史料館)
- [18] 「黎元洪及故張之洞の令息留学希望に関する件照会」(JACAR Ref B12081650600 大正9年2月13日, 支那駐屯軍司令官南次郎から陸軍次官山梨半造宛文書, 外務省外交史料館)
- [19] 「天津総領事船津辰一郎から外務大臣内田康哉宛文書」(JACAR Ref B12081650600 大正9年2月10日, 外務省外交史料館)。
- [20] 「黎元洪長子及故張之洞第五子の本邦留学に関する件」(JACAR Ref B12081650600 大正9年2月18日, 外務次官埴原正直から学習院長北條時敬宛文書, 外務省外交史料館)
- [21] 「黎元洪子息渡日に関する件」(JACAR Ref B12081650600 大正9年3月4日, 天津総領事船津辰一郎から外務大臣内田康哉宛文書, 外務省外交史料館)
- [22] 「黎元洪長子及故張之洞五子本邦留学方ニ関スル件」(JACAR Ref B12081650600 大正9年3月7日, 外務大臣内田康哉から天津総領事船津辰一郎宛文書, 外務省外交史料館)
- [23] 「黎元洪長子及故張之洞五子本邦留学方ニ関スル件」(JACAR Ref B12081650600 大正9年3月9日, 天津総領事船津辰一郎から外務大臣内田康哉宛文書, 外務省外交史料館)
- [24] 「黎元洪長子外一名学習院入学方に関する件」(JACAR Ref B12081650600 大正9年3月10日, 外務次官埴原正直から学習院長北條時敬宛文書, 外務省外交史料館) および「黎元洪長子及故張之洞五子来朝に対し便宜供与方に関する件」(JACAR Ref B12081650600 大正9年3月11日, 埴原正直外務次官から大蔵次官神野勝太郎宛文書, 外務省外交史料館)
- [25] 「黎元洪長子及故張之洞五子本邦留学方ニ関スル件」(JACAR Ref B12081650600 大正9年3月25日, 内田外務大臣から船津総領事宛文書, 外務省外交史料館) および「黎及張子息等の本邦留学に対する漢字紙の論評に関する件」(JACAR Ref B12081650600 大正9年3月27日, 船津総領事から内田外務大臣宛文書, 外務省外交史料館)
- [26] 「在本邦中国留学生関係雑件 宣統帝弟等日本留学ノ件」(JACAR Ref B04011357700 昭和4年2月7日, 天津総領事代理領事田代重徳から田中義一外務大臣宛文書, 外務省外交史料館)
- [27] 愛新覺羅溥傑『溥傑自伝—「満洲国」皇弟を生きて』(改訂新版, 河出書房新社, 2011年) 59-60 参照。
- [28] 「宣統帝令弟, 大連へ単身入り込む」『東京朝日新聞』1928年6月18日版(朝刊) 参照。
- [29] 徐良(1893-1951)は康有為の愛弟子・徐勤の子。日本に留学し, 横浜大同学校入学, その後米国コロンビア大学, ワシントン大学卒業。帰国後は中華民国の外交官として活躍し, 1940年の王精衛政府に参加, 外交政務次長・中央政治委員会外交専門委員会主任委員となる。その後も, 外交部長, 華北政務委員会委員, 国民政府委員等を歴任。日中戦争終了後には漢奸として逮捕され, 1951年処刑された。
- [30] 前掲注 [27] 『溥傑自伝』60-62 頁参照。
- [31] 前掲注 [26] 参照
- [32] 「在本邦中国留学生関係雑件 宣統帝弟等日本留学ノ件」(JACAR Ref B04011357700, 昭和4年3月2日, 天津総領事代理領事田代重徳から田中義一外務大臣宛文書, 外務省外交史料館)。なお, 仮名によって秘密裏に出航したにもかかわらず, 『東京朝日新聞』1929年3月3日版(朝刊)には「宣統帝の実弟 日本に留学」の記事が掲載されている。この記事でも「二人とも将来士官学校入学の希望である」とあり, 学習院への入学は決まっていなかった。ちなみに, 溥傑の仮名の「金秉藩」は曾國藩の志を受け継いで留学が終わったら帰国して清朝復活のために尽くす

- という意味、潤麒の仮名の「郭継英」は明朝の開国の名将沐英を継ぎ、旧朝に忠実たれという意味だと言う（前掲注 [27]『溥傑自伝』63-64 頁参照）
- [33] 前掲注 [27]『溥傑自伝』64-65 頁。溥傑は自伝で遠山を通じて「大倉喜七郎」の支援を得たとある。その一方で、前掲注 [26] では、天津を出発する前に「大倉喜八郎」の支援は決まっていた。大倉喜八郎（1837-1928）は大倉財閥の創設者、溥傑等が天津を出発した 1929 年にはすでに、喜八郎は死去している。大倉喜七郎（1882-1963）は喜八郎の子、大倉財閥の 2 代目総帥である。
- [34] 前掲注 [27]『溥傑自伝』65 頁では、中等科で一年間勉強し、翌昭和 5（1930）年 4 月、高等科に進んだ、とあるが、『入院学生名簿』には昭和 5 年に高等科に入学したとしか書かれておらず、中等科に入学した記録は見られない。
- [35] 前掲注 [27]『溥傑自伝』65-66 頁。なお、塩谷温（1878-1962）は中国文学研究者、『支那文学概論講話』などを著した。明治 37（1904）年から学習院にて漢文・作文の授業を担当し、その後、東京帝国大学教授となる。大正 12（1923）年から昭和 16（1941）年まで学習院で講師をつとめた（学習院大学東洋文化研究所編『知識は東アジアの海を渡った—学習院大学コレクションの世界』丸善プラネット）。溥傑が学んだ時期は講師として学習院に出講していた時期にあたる。
- [36] 前掲注 [27]『溥傑自伝』69 頁。しかし、「在本邦中国留学生関係雑件 宣統帝弟等日本留学ノ件」（JACAR Ref B04011357700, 昭和 6 年 4 月 6 日、桑島総領事から幣原外務大臣宛文書、外務省外交史料館）では、昭和 6（1931）年 4 月 6 日、溥傑は清水武雄、潤麒は清水文雄の仮名で天津を発して北嶺丸にて帰国した、とある。この文書に依るならば、二人が清水を名乗ったのは満洲事変前ということになり、『溥傑自伝』で名を変えた満洲国成立前後とは時期が異なることになる。なお、溥儀が満洲国執政に就任することが決まったことに対する溥傑の喜びの言葉を載せた 1932 年 2 月 20 日の『東京朝日新聞』の「祝電だと大喜び 肉親の兄姉を語る 両君杉並の仮住居で」の記事には、溥傑氏は「名も日本名に次雄と呼ばれ、潤麒氏も武雄と呼ぶ親日ぶり」とある。
- [37] 「溥儀氏の令弟帰国 執政就任お祝いのため」『読売新聞』1932 年 3 月 14 日、「溥儀氏令弟大阪から旅客機」『読売新聞』1932 年 3 月 15 日（夕刊）、「元首夫妻と久々の対面 令弟たち新京着」『東京朝日新聞』1932 年 3 月 17 日
- [38] 「「新京はまだ田舎 執政の令弟帰る」『東京朝日新聞』、1932 年 4 月 5 日記事
- [39] 「在本邦留学生便宜供与関係雑件 陸軍省 溥傑・潤麒」（JACAR Ref.B05015596000, 昭和 7 年 3 月 19 日、田代領事から芳澤外務大臣宛文書、外務省外交史料館）。ちなみに、『東京朝日新聞』（夕刊、1932 年 3 月 15 日）の「喜を乗せ旅客機で 兄君の国「満洲」へ 溥傑氏等けさ大阪発」の記事では武田秀三氏の話として「溥傑さんも潤麒さんも学習院では三年生で独文科をやっています。もう少しで卒業ですが、そうしたら帝大の経済へ入って勉強するつもりです」とある。この二日後、武田氏は帝大ではなく、陸軍士官学校への進学を天津領事館に伝えたことになる。
- [40] 「潤麒氏と三格姫結婚 昨 15 日黄道吉日に挙式」『東京朝日新聞』1932 年 8 月 16 日
- [41] 定直庄『老北京人の口述歴史』中国社会科学出版社、2009 年。なお、本書のインタビューは「老北京人の口述歴史 過眼雲煙説往事—奎垣口述」として WEB 公開されている。<http://lz.book.sohu.com/chapter-538514.html>（2016 年 12 月 1 日確認）
- [42] 「郭春秧叙勲ノ件」（JACAR Ref A10112866800, 国立公文書館、大正 8 年）、河原林直人『近代アジアと台湾』（世界思想社、2003 年）80 頁参照
- [43] 前掲注 [42]『近代アジアと台湾』78 頁および『台湾人士鑑』台湾新民報社、1937 年参照

- [44] 『組合沿革史』 同業組合台湾茶商公会, 1938年
- [45] 前掲注 [42] 『近代アジアと台湾』 78頁および前掲 (注43) 『台湾人士鑑』 参照
- [46] 河原林直人「植民地台湾の財界構成: 1941年を中心に」『名古屋学院大学論集 (社会科学編)』 45巻4号, 2009年。
- [47] なお, 陳の俗称の潁川 (えがわ) は, 河南省の地名である潁川 (えいせん) に由来する。潁川出身の陳氏は潁川陳氏と呼ばれ, 三国時代の陳羣が有名である。明末に潁川出身の陳氏が福建から日本へ移住し, 潁川 (えがわ) を名乗るようになった。俗称の潁川は, 『入学名簿』 では陳守毅の時にはなく, 陳守実では陳 (潁川) 守実とカッコ付き表示陳守信では陳がなく潁川守信のみとなっている。なお, 父の陳清波の日本名は田川であり, 潁川ではない。
- [48] 『中華民国工商人物志』 1963年
- [49] 犬養康彦「顔惠民君の軌跡」『雪山の楽しければ… 回想・顔惠民』 顔惠民追悼文集発行委員会, 2000年。犬養康彦 (1928-2015) は顔惠民の同級生で, 共同通信社長となった。
- [50] 顔惠民とその家族については, 一青妙『私の箱子』 講談社, 2012年, 「一青姉妹と顔家 1~4 (アジアズームイン)」 (野島剛) 『朝日新聞』 (夕刊, 2008年10月27・29~31日) などがある。

(むらまつ こういち 学習院大学国際研究教育機構教授)